

「プロレタリア」概念の再構築

——「フェミニスト世界システム論」の視角から——

古 田 睦 美

1 マルクス主義パラダイムにおける「プロレタリア」概念

本稿の目的は、エコ・フェミニスト世界システム論のパスpekティブにたつてこれまでのマルクス主義思想におけるプロレタリア概念を再検討し、それを再構築することである。そのためにまず、マルクス主義思想のパラダイムにおいて構築され流布している「プロレタリア」概念について、今日的視角から整理しておこう。

プロレタリアという概念が、マルクス主義思想において、その政治的主体（歴史の主人公）であるという意味においても、また資本主義という特定の歴史時代において現われる経済的に典型的存在である

という意味においても、もつとも重要な概念であるということはいままでもない。ところで、このマルクス主義的意味におけるプロレタリア概念は、マルクス主義思想の成立の前提条件となる啓蒙思想パラダイムにおける「市民」としての人間概念の批判的継承のもとに形成されたものである。したがって、ここでは啓蒙思想からの継承点と対立点を考察しながら、マルクス主義的プロレタリア概念についてまず整理を試みてみたい。

マルクス主義パラダイムにおけるプロレタリア概念はまず第一に資本主義的経済活動において、資本家とならぶ経済的主体カテゴリーである。資本の原始的蓄積過程をつうじて、資本家と、土地と生産手段の両者から切り離され自分の労働力を売ること

生活の糧を得るほかは無いプロレタリアが生成し、それこそが資本主義の成立の不可欠の条件である。こうして資本家とプロレタリアが成立すると、両者は経済的活動において契約関係をとりむすぶ。資本家は個々に競い合う自由な経済競争の主体であり、一方プロレタリアは自分の労働力に対しては自由にそれを切り売りする資格を有している、という意味です。すなわち自分自身の労働力の売買に関する自由な主人である。

この「自由な契約主体」という観念は、啓蒙思想において提示された市民社会における自由な契約主体としての個人（ないしブルジョワ市民）という観念の延長上に成立したものである。しかし、この「契約主体としての自由な個人」Vという主体概念は、ブルジョア法上想定し得るものであるとしても、現実の資本主義原理のもとでは幻想でしかなく、資本家とプロレタリアとの契約は、不自由、不平等な階級関係でしかありえないことを暴露したのが、マルクスの労働価値説にもとづく剰余価値搾取の理論であった。資本主義的存在としての資本家とプロレタリアがとりむすぶ生産関係は、最大利潤の追求と資本蓄積という資本主義原理の命ずる目的を遂行する

人的表現であるところの「資本家」による、「プロレタリア」の生み出す剰余価値の搾取であり、それが資本主義社会の現実のメカニズムなのであり、そうしてみると、自由な契約などというものは、階級関係を隠ぺいするブルジョワジーのレトリックでしかない。というのが、おおむね皆が同意できるマルクス主義の経済原論におけるプロレタリア概念ではないかと、思われる。

それに加えて、現在まで普及しているマルクス以降のマルクス主義思想においては、次のような点がマルクス主義の常識として流布しているのではないかとと思われる。一つは、「商品化とプロレタリア化」が資本主義の成立を表すメルクマール（すなわち、ある地域が資本主義になったかどうかは資本家とプロレタリアの成立によって証明できるということ）であり、資本主義の進展によって商品化とプロレタリア化がますます進行し全世界を覆い尽くすだろう、というモーリスドップ的な資本主義定義である。二つ目は、資本主義という特定の歴史時代の根本的矛盾は剰余価値の搾取をめぐる生じる資本家とプロレタリアートとの階級対立であり、全人類の利害を代表する政治的主役はまさにプロレタリアー

トであるという政治に対する捉え方である。

こうしたマルクス主義のいわゆる「常識」に対して、現代的な社会状況を反映した多様な新しい政治運動やそれらの理論はそれぞれの視点から様々な批判を行なってきた。また、学問的には、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカといった地域を対象とした経済的・歴史的分析と政治的展望の理論的蓄積が様々な史的唯物論の新しい理論として登場してきた。その理由は、こうした諸地域には、上述したような資本主義概念やプロレタリア概念にあてはまらない生産関係が満ち溢れているにもかかわらず、それらはまぎれもなく世界規模での資本主義的経済システムに巻き込まれ、または生み出され、そのシステムの一環として機能しているのであるから、既存の資本主義社会についての理論や諸概念が現実に対する説明能力を持っていないということであり、そして、誤った理論は現実を正確に反映するものへとつくり直される必要があったからである。

こうした新しい諸理論のマルクス主義への批判は、百花繚乱の理論状況のもとに、それぞれ断片的に行なわれてきた。そのすべてを総括するなどということは私の手にあまるし、ほとんど意味がないよ

うにも思われる。本稿では、こうした新しい理論の批判的エッセンスを活かしながら、エコロジーとフェミニズムと世界システム論のパスpekティブを統合して独創的な理論を創造しようとしているドイツのフェミニスト、マリア・ミース、ベロニカ・ベンホルト・トムゼン、クラウディア・フォン・ヴェールホーフから示唆を受けながら、とくにマルクス主義のプロレタリア概念をとりあげてそれを批判、再構築したいと思う⁽¹⁾。

2 エコ・フェミニ世界システム論のパスpek

クティヴによる批判⁽²⁾

周辺諸国にみられる典型的に資本主義的ではないとされる生産関係の分析と、そうした状況における実現可能で有意義な政治的戦略をめぐる諸理論は、「従属理論」「接(節)合理論」などとよばれた。これらは一言で言えば、周辺諸国のいわゆる「非資本主義的な生産関係(ないし生産様式)」と先進ヨーロッパ諸国のようないわゆる典型的に「資本主義的な生産関係(ないし生産様式)」が、相互に関連を持っているということ、そして両者の関連というの

は、先進諸国が富めば富むほど周辺諸国が貧困に陥っていくという関係になっていくということを明かにした。こうした主張のエッセンスは、A・G・フランクの「世界経済論」的視角に凝集されるが、これをさらに歴史的アプローチをもちいて発展させたのがエマニュエル・ウオーラーSTEINの世界システムパースペクティヴであるといえる。これらの諸論は、イギリスを典型とする資本主義モデルを前提としていたマルクス主義理論に対して、その理論のヨーロッパ中心主義的偏向を自覚させ、従来の「資本主義概念」「プロレタリア概念」に批判の一角を投じた⁽³⁾。

また、草の根の自然発生的エネルギーの噴出としてくりひろげられた様々な新しい社会運動とそれらの理論は、マルクス主義の運動と理論に対して様々な現代的で有意義な批判をつきつけた。紙面の都合上おもいきり端折って言うと、それらの批判のうちもつとも重要なものは、エコロジ、オルタナティヴ提出運動によって提示された「近代主義批判」と、反エスニック差別運動によってもたらされた「白人優位主義批判」であろう。一九五〇年代六〇年代までの既存のマルクス主義は、この三つの大

きな批判によって、自らが陥っていた△ヨーロッパ中心主義的、白人優位主義的、近代主義的偏向▽に気づかされ、自己革新を迫られることになった。

このような様々な新しい理論のいない手たちは、それぞれ独自の現代的で創造的な理論を展開したのであるが、そこにはもう一つの重要な視点が欠落しており、それゆえに唯物世界をトータルにつかみ取ることができず、したがって理論的誤りに陥っていた。そのもう一つの視点とは、フェミニズムが提起した△男性優位主義▽の視角(経済学的にはとりわけ家事労働に代表される無賃労働の視角)である。

たとえば、さきあげた三人のうちの一人ヴェールホフは、「世界経済論の視点」を踏襲しているが、そこには決定的に「無賃労働を典型とする女性労働」をみる目が欠けていることを指摘し、フランク理論やウオーラーSTEINの世界システム論を「世界の半分がみえていない」理論であり、「部分的システム思考」にすぎないと批判してその乗りこえを図る。たしかに、男たちの世界システム論は世界経済の中心部の典型的な「資本主義」と周辺部の「非資本主義」が関係して一つの全体構造をつくっていることを発見し理論化しようとしてきた。だが、実

際には周辺部だけでなく、中心部にも典型的に資本主義的ではない生産関係が存在しており、それらはひどい場合には無賃金であり、最低の労働条件であり、ほとんどの場合「経済」や「生産」の外部もしくは「私的な領域」の活動であると考えられているが、それにもかかわらず世界規模での経済システムに不可欠の一環として組み込まれているのだ、と彼女は言うのである。そして、この無賃労働を世界経済システムの一部に組み込むことのできる理論を構築しようというのである。

ウォーラーSTEINが、たとえば、従来非資本主義的形態の労働だと考えられてきた、インディオの使役労働であるエンコミエンダを世界経済システムの一部であるといった時、実際に労資関係の下に組織されておらず、剰余価値を搾取されているともいえない、粗野な形態の搾取が現代の世界経済システムにとってより多くの富をもたらす源泉なのだというところに、多くの人々は戸惑いながらもしげしげ同意し、資本主義世界経済システムは「非資本主義的生産関係」をも内部にくらい込むのだと納得したことだろう。だが、中心諸国たとえばドイツやイギリスに存在する現代の女性の低賃金労働（その最も低

い賃金のもの）がつまり無賃労働、たとえば家庭の主婦の家事労働が世界規模での資本主義のメカニズムそのものの作動によって生み出され、国際分業構造の変動に従って中心部諸国の女性へと割り当てられた労働であり、世界経済システムの一環であるということが理解されるのはいっそう困難なことである。

それはなぜだろうか。マルクス主義は社会を「資本主義」として捉え、また新しい批判理論のいずれもが世界を「資本主義」と「非資本主義」との関係として捉えようとしてきた。ところが、フェミニズムは無賃労働を資本主義の一部だと主張するのであるから、もはや世界を「資本主義」と「非資本主義」との関係としてみる議論の土俵にたっていない。いつてみれば、資本主義—非資本主義の paradigma 自体を革新し、新しい地平にたつて資本主義概念を再構築してしまっているのである。

そしてこの三人は、このパラダイムの革新を、エコロジとフェミニズムと世界システム論を統合した視角から白人中心主義、ヨーロッパ中心主義、近代主義、そして男性優位主義を乗りこえることで成し遂げようとした。それは、上述のようにマル

クス主義とその男性たちによる批判理論のパラダイムを乗りこえようとする壮大な試みなのだが、そのなかでは様々な概念の再構築とともに「プロレタリア概念」の再構築も試みられている。次にそれに話を絞ることにしよう。

3 プロレタリア概念脱構築と再構築

さて、従来マルクス主義の常識として想定されていたプロレタリアは、土地や生産手段から切り離された労働力の自由な売り手であり、団結権や交渉権の法的保障を勝ち取り、組合を結成し、その加護のもと労災、最低賃金保障、家族賃金といった労働条件を享受する主体であり、また、剰余価値を搾取されているがゆえに資本主義社会を変革し人類を解放する歴史的任務を負った政治的主体であった。

このマルクス主義のプロレタリア概念が当てはまるのは、エコ・フェミ世界システム論の視角からみれば、「世界システムの中心部に存在する白人の男性からなる労働者」というきわめて希少な、また、世界の人口のうちのほんの僅かな数でしかない、いわば世界システムの中心部の特権層であるというこ

とになる。世界中の総労働人口の圧倒的に多くの部分は、自分の労働力さえ自由に売買することのできない（ある場合には半分土地に縛り付けられ、ある場合には無賃で、ある場合には労働法の適応外にあるような）、典型的なプロレタリアに似ても似つかない労働者である。そして彼らは労働運動においても周辺のな地位でしかないか、あるいは資本主義の歴史時代にはまったく活躍の場面を期待されてもいない周辺のな政治的地位に追いやられている。ヴェールホフにいわせれば、それらの存在形態は「プロレタリア」というよりも「主婦」へと近づいている。

マルクス主義の理論も、そして政治運動もこれらの圧倒的に多くの人々を理論の枠外においたために、（もつと根本的には、偏向した狭隘な世界観にたっていたためにそうなったのであるが）勝利することができなかつた。つまり、誤っていたのである。

なぜ、そのような隘路へと陥ってしまったのか。マルクス主義の「プロレタリア」概念、その根底にある「人間」観、さらにそうした人間が従事する「生産」およびその生産が形づくる「経済」や「資

本主義」といった諸概念がそもそも白人中心主義、ヨーロッパ中心主義、近代主義、そして男性優位主義の偏向を内在していたからだと言え、エコ・フェミニ世界システム論は示唆する。

その論点を紹介しよう。まず、エコ・フェミニ世界システム論は、マルクス主義の資本主義理論に内包されている「生産」概念それ自体をそもそも問題にする。エンゲルスは、『家族・私有財産・国家の起源』の序文において「生命の生産と再生産（生活資料の生産とそれによる生命の維持）」を歴史を規定する究極の要因であるとした。だが、マルクスは、このうちの直接的な生命の生産、つまり生殖活動による労働力の生産を「安んじて労働者の本能に任せることができると」え、物資の生産に的を絞って『資本論』を著わした。ここから、「生産」「経済」といった概念のおよぶ領域が「物資の生産」に限られることとなった。これが、偏向したプロレタリア概念が成立する重要な契機である。

このマルクスの世界観における重要な問題点は、彼の世界観に内在する「自然」と「社会」の二項対立的把握である。マルクスは性行為や生殖活動を「本能」という「自然」の領域の内部に位置づけ、社

会的、経済的、政治的行為とはとらえなかった。換言すればマルクスはこの二項対立にまどわされ唯物世界の全体をトータルに把握していなかったのである。この二分法は、「経済社会と家族」、資本主義的領域と非資本主義的領域、「経済とその外部（尽きることのない資源の宝庫としての自然、または新たな労働力）」、さらには「社会・文化としての男性—自然としての女性」といった二分法を導くことになった。つまり、マルクス主義の思想において「人間」や「生産」や「経済」「資本主義」から女性という人類の半分が除外されてしまったのである。

さらに、エコ・フェミニ世界システム論は、マルクス主義の世界観に二分法が内包されており量的に人類の半分が対象外におかれていたということとは別に、マルクス主義経済理論のつかつているところの「生産」パラダイムそれ自体が男性優位主義に偏向していたことを問題にしている。ミースは、フェミニスト文化人類学のこれまでの成果を総合し、「男性—狩猟民」神話を解体しながら、男性が「生産」とよんでいるものは、実は女性からみた「非生産」、すなわち「破壊」「略奪」にすぎないことを暴

き出した。「資本主義的生産」が「他人の搾取」でありまた「自然の領有」であり、同様に「開発」が「自然の破壊」であり、決して真の「生産」でないのは、男性的思考における「生産」の本質の現れである。女性は男性が戦争や捕虜略奪による他部族の収奪に明け暮れる間にも作物を生産し、労働力を生産し、生命を維持させてきた。男性が収奪によって奪い取るもの、それは女性が自然に働きかけて作りだした富である。だが男性的に偏向した生産パラダイムにおいては、女性の労働とそれによる真の意味での生産は「生産」の外にある「自然」の働きとされてしまうのである。

ミースいわく、こうしてみると、男性の「生産」は「不生産」「破壊」でしかなく、同様に「資本主義」ないし「資本主義的生産」は太古の昔から続いている「略奪」の最新形態でしかない。そして、この男性的意味での「生産」を行なう者こそがマルクス主義の「プロレタリア」なのである。そして、その「生産」を行なう男性のみが「社会」「資本主義」を形成しているのであって、女性はその外部、つまり「自然」の領域に属しているとされてしまうのである。女性の行なう労働は、自然の活動であるとき

れ、ゆえに経済学的価値をつくりださないとされ、したがって「無賃」であつてもなんら問題にさえならないのである。

以上のようにマルクス主義のプロレタリア概念の誤りの根底には「自然」と「社会」を分離対立するものと捉え、「略奪」こそを「生産」と捉えるような男性的偏見がある。そしてそれは、自然を破壊すること（開発）が生産であり発展ですら得ると考える近代主義の基礎ともなっている。

これを筆者の言葉で言い換えると、マルクスの間観の限界でもある。彼は人間を「類的本質存在」として、また、「社会的本質存在」として語ったが、共産制において十全に開花し得る本来の人間としてこれらを語る場合、この両者は重なり合うものとして語られていたはずであると思われる。しかし、資本論の世界においては「類的本質存在」の方は、実際にはオミットされているか、あるいは生命の生産と維持の部分をそぎ落とされて不完全にしか展開されていらないことになるのではあるまいか。

物質的な肉体に根を降ろした「類的本質存在」であり同時に「社会的本質存在」であるような人間概念、それはフェミニズムとエコロジーの批判によつ

てマルクス主義が鍛え直されることをつうじてはじめて再構築されることになったのである。

さて、以上にみてきたように、プロレタリア概念は幾重にも重なったイデオロギー的偏向の上に構築されてきたのであり、現実の世界システムの分析にこの概念を用いることも、またこの概念に将来の政治的主人公を期待することもできない。そこでエコ・フェミ世界システム論は、来るべき未来社会を構成する主体として、「サブシステム生産者」という概念を構築した。サブシステム生産者とは、他人を搾取するのではなく、自然に働きかけて「生きるために生産をする者」「生命を維持するために生産するもの」、真の意味での生産を行なうものであり、自然と協業し、自分自身（および他人の）生命を産み維持する労働者である。このサブシステム生産者概念こそ、エコ・フェミ世界システム論のパラダイムにおいて再構築されたプロレタリア概念なのではないだろうか。

註

- (1) マリア・ミース、ベロニカ・ベンホルトトム

ゼン、クラウディア・フォン・ヴェールホーフ著
〔古田睦美・善本祐子訳〕『世界システムと女性』
藤原書店一九九五年を参照。

- (2) 前掲拙訳の解題のなかで、筆者はこの三人の理論を「フェミニスト世界システム論」と呼んでいるのであるが、彼女たちの理論的立場は、正確にはエコロジーとフェミニズムの視点から既存の世界システム論を乗り越えようとするものであるから、エコロジーというのをどこかにつけるべきである、と常々考えていた。最近メアリ・メラが自らの立場を「エコ・フェミ社会主義」としているのを知り、それと対比させて、本稿では「エコ・フェミ世界システム論」とよぶことにした。
- (3) ウォーラーSTEIN『史的システムとしての資本主義』岩波書店参照。

（ふるた むつみ 長野大学・社会学）